

式 辞

本日、学びを修了され新たな出発をされる皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。そして、この学びを支えていただきましたご家族、ご来賓の皆様をはじめとする関係者の皆様に心より敬意と感謝の意を表します。

思い起こせば、皆さんの大学生活は新型コロナウイルス感染症拡大の脅威の中でスタートしました。希望をもって入学した皆さんの学びと安全を確保すべく、体育館や臨床実習室を講義室に変え、遠隔授業ができる体制も整えました。その中で、実習という看護の実践力を培い、看護師として、そして人として大きく成長をする学修の場にも制限がかけられたことは、看護教育者にとってつらい問題でした。しかし、このような状況の中、教職員一同が「なんとしても、皆さんを本学が目指す看護師に育てるのだ」という強い思いで、教育方法を工夫し、教育環境を整えました。皆さんは戸惑いながらも目指す道に向かって一生懸命努力を重ねられました。同じ志を持ち、ともに奮闘した日々がなつかしく思い出されます。

多くの制限を伴ったコロナ禍での学びは、「不運な大学生活」と表現されることがあります。しかし、見方を変えれば、非常に貴重な経験をしたともいえるのです。

人類の歴史が示すように、今後も新たな感染症への対応を迫られることもあるでしょう。そのときに、今回の経験は必ずや生かされると思います。そして、皆さんが目の当たりにした、コロナ禍で活躍する看護師の姿は、「専門職とはなにか」そのあるべき姿を、皆さんに示した^{かがみ}鑑となったと思います。

実習の制限により十分培うことができなかった皆さんの看護実践力は、これから就職する現場に委ねることになりました。看護の現場では、この状況を理解し皆さんの受け入れ体制を整えてくださっています。看護の先輩方の指導を受け、日々精進しながら成長さ

れることを切に願います。

これから皆さんは、様々な医療現場に身を置き、様々な看護の対象者と向き合う中で、本学で学んできた以上のものが求められるはずです。そして、多くの先輩方が経験したように、自分がやっていることは果たして「看護といえるのか」と悩むことも出てくるでしょう。その時に思い出していただきたい言葉があります。それは、「原点にもどれ」です。本学の学びは皆さんにとっての原点です。看護実践や研究で悩んだとき、行き詰ったときは、本学での学びを思い出し、「看護とは何か」「研究とは何か」、「何のためにそれをやるのか」、これを問い、考えることで、必ずや解決の方向性が見えてくるはずです。

本学での学びは、このような看護や研究の基盤をなす重要な考え方です。そして皆さんはそのような学びを通して、問題解決能力をしっかりと身につけたはずです。私たち教員はそのような教育をしてきたという自負があります。

これから独り立ちをする皆さんを支え、成長させてくれるのが、患者様や医療関係者、ご家族などからいただく言葉や笑顔です。それが皆さんの活動の原動力となっていくでしょう。

「どのような場においても、どのような方に対しても、その方にあった看護を実践できる」、そのような力を持った専門職として、ご自身の夢にむかって羽ばたかれることを心より祈念し、私の式辞といたします。

ご卒業、おめでとうございます。

令和6年3月18日

宮崎県立看護大学 学長 長鶴 美佐子